

堂の前遺跡

昭和51年度調査略報

山形教育委員会

山形県教育委員会





堂の前遺跡

昭和51年度調査略報

昭和52年3月

序

堂の前遺跡は、昭和49年度以来、国庫補助事業として発掘調査を実施しております。

この遺跡は、近接する史跡「城輪柵跡」との関連で重要視されていましたが、この附近一帯に農業基盤整備事業が計画されたため、緊急に遺跡の性格と範囲を確認する必要が生じ、発掘調査に着手することになったものであります。

本報告書は、昭和51年度調査結果の概要をとりまとめたものでありますが、1次から5次までの概要にも一部触れてあります。今後多くの方々にご活用ご理解いただければ幸いと存じます。

調査にあたって種々ご協力をいただきました調査委員の先生方ならびに八幡町教育委員会、地元の方々に厚くお礼を申しあげます。

昭和52年3月

山形県教育委員会
教育長 赤星 武次郎

例　　言

- 1 本書は、山形県教育委員会が昭和51年度に国庫補助を得て実施した、堂の前遺跡の発掘調査の略報である。
- 2 発掘調査は山形県教育文化課の尾形興典・佐藤庄一・名和達朗が担当した。
- 3 調査にあたって調査委員として、柏倉亮吉（山形大学名誉教授）、佐藤 巧（東北大学教授）、佐藤祐宏（酒田市立酒田中央高等学校教諭）、桑原滋郎（宮城県多賀城跡研究所技師）の4氏を委嘱し、調査の指導をお願いした。このほか安江保民（山形大学教授）、小野 忍（酒田市教育委員会）の諸氏にも調査中ご指導をいただいた。記して感謝の意を申しあげる。
- 4 本書の執筆・整図は尾形興典が担当し、編集は佐藤庄一があつた。
- 5 出土遺物に関しては後日まとめて報告することとし、本書では調査経過や発見遺構についての概略を述べるにとどめた。

目　　次

I	調査の経緯	2
II	昭和51年度調査計画	4
III	第5次調査	
	調査経過	4
	遺構	6
IV	まとめ	10

挿　　図

Fig 1	環境図	1
Fig 2	調査区設定図	3
Fig 3	遺構模式図	5

付　　図

付図1	遺構実測図	付図3	遺構実測図
付図2	遺構実測図	付図4	遺構実測図

図　　版

PL 1	1 調査区発掘前状況	2 1区発掘状況
PL 2	1 S A 128 (東より望む)	2 同 近接
PL 3	1 2区発掘状況	2 4区発掘状況 (南側S B 003 南辺)
PL 4	1 4区発掘状況	2 3区発掘状況 (北より望む)
PL 5	1 E B 215 検出状況	2 E B 217 検出状況
PL 6	1 S X 216 検出状況	2 筒地業露出状況 (北より望む)

Fig 1 環境図



I 調査の経緯

堂の前遺跡は、鶴ヶ原八幡町法連寺字堂の前にある。日向川・荒瀬川の合流点に近く、荒瀬川の旧氾濫原上に位置しており、標高約15m、西・南にいくにつれて低くなっている。

付近には、出羽国府跡と考えられている史跡「城輪櫛跡」をはじめとして、庄内東部丘陵地域古窯跡群や、大物忌神社の口ノ宮、条里制の遺跡など、律令制下の出羽國を考える上で貴重な遺跡が数多く分布する。

堂の前遺跡付近から木材や土器などが発見されること、古くから知られていたが、遺跡の価値が初めて認識されるに至ったのは昭和30年になってからである。

この年、本遺跡付近の水田一帯に暗渠設置工事が施工され、工事中に多量の木材が発見された。この後、地元有志によって小規模な調査が実施され、その結果、多量の建築部材、土器などの遺物が発見されたと言う。

昭和48年になって、遺跡付近に、東北電力K.K.による送電塔の架け替え計画や一条バイパスの建設計画が予定されたため、遺跡の性格と範囲の一層確認を目的とした分布調査（これを予備調査と呼称している）が、八幡町教育委員会によって実施され、その結果、建築部材が密集して発見され（これはのちに筏地業と判明した）、土器や建築部材の一部などから、平安時代後半～鎌倉時代初期頃のものと推定された。

これらの成果によって、さきの送電塔や一条バイパスの計画は、遺跡の推定範囲からははずされることになったが、また、新たに「庄内地区農業基盤総合整備バイロット事業」「大規模県営最上川右岸圃場整備事業」などの大規模な開発が予定され、遺跡の適切な保護対策を早急にたてる必要が出て来た。

山形県教育委員会では、これまでの調査資料をもとに、遺跡の範囲と性格の究明を目的とした、3ヶ年にわたる分布調査を計画し、国庫補助を得て、八幡町教育委員会の協力のもとに、昭和49年から調査を実施した。

調査は3ヶ年5次にわたりて次の様に実施された。

第1次 S.49 10～12 遺跡の外画確認のため、東西に180mのトレンチを設定。筏地業の上部遺構の存否確認。

第2次 S.50 4～5 東外画線追求のためのボーリング探査。

東北電力K.K.の鉄塔建設予定地の試掘調査。

第3次 S.50 7～8 S B 001 基壇跡地区的精査。およびⅣ A 166 地区の精査。

第4次 S.50 10～12 S E 001 井戸跡の調査。東北電力K.K.の鉄塔建設予定地の試掘調査。南外画線追求のためのボーリング探査及び試掘調査。

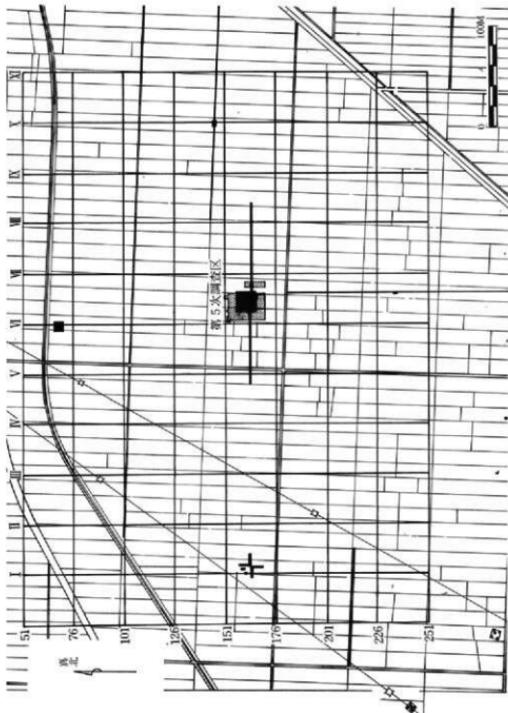


Fig. 2 調査区検定図

II 昭和51年度調査計画

昭和51年度計画は、国庫補助を得て山形県が実施する、3年度に亘る分布調査の最終年度にある。

今まで、調査の目的を、遺跡の範囲と性格の究明において来たが、このうち、外画線の確認による範囲追求にかんしては、諸々の点で限界に達しているので、今回は、性格面からの追求を主眼とした調査を行なうこととした。そこで第5次調査では、これまで比較的くわしく調査を行なっている、SB001 基壇跡の近隣地区を精査する旨を取り決め、第3次調査時の発掘区域の外側に、 1152m^2 にわたる調査区を設定した。

III 第5次調査

調査経過

7月7日に現地に着き、地元教育委員会との打合せ後、現場設営にとりかかり、これと併行し、調査区の抗打ちにかかった。

発掘に先立つて、調査区を便宜上4分し、夫々1~4区と仮称した。

1区はⅧC152区を北西とし、ⅧF169区を南東とする72グリッド(288m^2)

2区はⅧG152区を北西とし、ⅧO155区を南東とする36グリッド(144m^2)

3区はⅧS152区を北西とし、ⅧA169区を南東とする144グリッド(576m^2)

4区はⅧG166区を北西とし、ⅧO169区を南東とする36グリッド(144m^2)である。

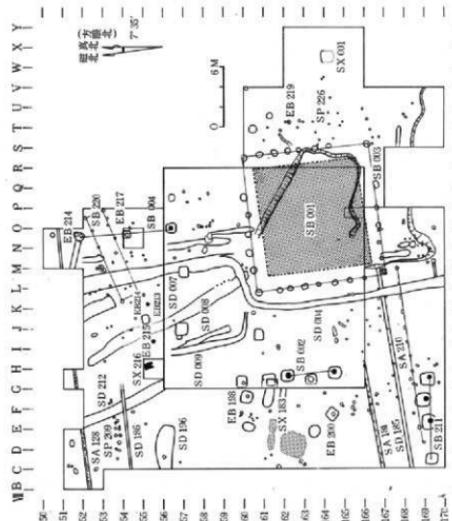
抗打ちは8日目すぎに完了したが、現場事務所ともいえるプレハブの組立てに手間取り、実際に発掘を開始したのは7月10日朝である。

発掘は1区から始まり、2区・4区の順に行ない、3区に着手したのは、これら3区域の粗剥ぎも終り、精査に入りはじめた8月3日である。遺構が略出揃った頃に調査委員会を開催し（8月9日）、調査の略完了した9月7日には現地説明会を行なった。

翌日の9月8日には、現場引場の準備を行なう一方、午後から手のすいた作業員に、2区ⅧB面を20cm程掘り下げさせたところ、EB217をはじめとして、EB213・214・215・SX216などが続々と発見された。

9月9日は朝から雨が降っており、雨中をついて記録を行なったが、かなり不満足なものになった事は否めない。10日には機材を積み込み、プレハブ解体、埋戻しを行なった。

結局、調査区は期間の関係から3区の面積を大幅に減じ、計195グリッド(780m^2)を調査するにとどまった。



遺構

今回の調査においても、発掘面積等の関係から、完結した形で遺構を検出することは出来なかつた。

今回は、これら部分的な遺構に対して、試みに、それぞれ番号を付けることとした。そして、その番号の前には、遺構の一要素であることを示すE(elementの頭文字)と、遺構の種類を示す記号とを付加する。

例えば、掘立建物跡は從来通りSBであるが、これを構成する一本の柱、あるいはひとつの掘方はEBとなる。(ex. E-B 101)

なお、これは、整理上の便法であることを付記しておく。

さて、以下に、今次調査で発見された遺構を略述する。

S A 128 矢板列

E-10°-Nの方向をもって、略東西に延びる矢板列である。

幅約30cm、深さ約30cmの掘方に底の平らな板を、互いにコバが接する様にして、密に並べたものであるが、板の並び方に疊密があり、東にいくにつれて疊らになっている様である。材質は杉の柱材である。

板は始んど垂直に立っているが、一部南の方に傾斜しているものもある。

ⅦM・N 150 区にある溝も、略これの延長線上に位置しているが、これには矢板はみられず、同じものであるか否かは不明である。

なお、S A 128 は、後述する S A 184 矢板列と良く似た様相を呈する。

出土遺物としては、土器類などは始んどみられないが、ⅦB 152 区、即ち確認最西端部で矢板のすぐそばから布目瓦片が一片出土している。小さいものであるが、曲率から推すと男瓦と思われる。

S P 209 ピット群

S A 128 と、次述の S D 186 溝跡との間に位置するピット群である。

全てがⅦC 153 区からⅦF 153 区の間に在り、略東西に群列をなしているが、その方向は、S A 128・S D 186 と略々同様である。

ピットは、直徑10cmから40cmまで種々あり、夫々の対応関係については不明である。

S D 186 溝跡

幅25~40cm、深さ4~5cmの溝で、E-7°-Nの傾きをもって略東西にのびており、後述の S D 185 溝跡に似た様相を呈している。

遺物は始んどみられない。

S D 212 溝跡

幅100~110 cm、深さ4~5cmの溝で、方向はN-25°-Wを測る。

S P 209・S D 186 を切ってつくられている。

S A 128 との交叉地点が末掘部分にあたるため、切り合い関係については不明である。

S D 196 溝跡

幅が広く浅い溝で、ほぼ東西にのびる。幅は最大160 cm、深さは4~6 cmを測る。

この溝を切ってピットがつくられており、ピットの中には板材が斜めにつきささっている。溝はさらに西にのびると思われるが、遺物の遺存はみられず、性格は不明である。

S X 216 性格不明遺構

遺構面(Ⅲb 文化相面)から30cmほど下で発見されたもので、発見の契機は全くの偶然である。幅17cm、厚さ5~6cmほどの、杉材と思われる3枚の板が平行に並んでおり、うち、西端のものは、コバを上方にして、斜めに立っている。その方向は、N-18°-Wを測る。東端の板の下には、幅21cm、長さ80cmほどの板が敷かれている。この板の方向は上の三者と違い、N-8°-Wを測る。

上方の2枚の板には、夫々8×10cmほどの、梢孔とも思われる様な孔が穿たれている。

この遺構は、調査の最終日に近く発見されたもので、おりからの雨の為、掘方その他は明らかに出来なかつた。ただ、Ⅲb 面からは、この遺構の存在を示唆する何物もみられなかつたので、Ⅲb 文化相面形成の時期よりは、ある程度遅るものと思われる。

E B 213・214・215・217 掘立柱跡

前述の S X 216 と同じく、調査の終了際に発見されたもので、おりからの降雨のため充分な調査、記録を得るまでに至らなかつた事は残念である。

E B 213 は、Ⅲb 面下約20cmのところから発見された直徑約30cm程の柱根であるが、掘方などは未確認である。

次の2者、即ちE B 214・215 もⅢb 面下20cm内外のところで発見されたものである。

E B 214 は東西85cm、南北70cm程の隅丸方形の掘方であるが、完掘していないので、深さ等は不明である。掘方の東西辺が、南に約10°傾いている。この掘方の上層、北側の縁りからは、鉢形の土器器が出土している。

E B 215 は、直徑約35cmの柱根であるが、掘方等は確認するに至らなかつた。また、柱根にしても、存在を確認するにとどめたため、柱根の遺存長などは不明のままである。

S D 131 溝跡

ほぼN-20°-Wを測る深い溝であり、溝内には河原石が散乱していた。

発掘時の様相、出土遺物などから近世以降のものと思われる。

S B 220 建物跡

直徑20~30cmの柱穴から構成される建物で、梁間は約180 cm (6尺) を測る。

桁行全長は900 cm (30尺) を測るが、確認されたのは2間のみである。この柱間を測ると約150 cm (5尺) になるので、単純計算を行なってみると、桁行は6間となり、梁間1間桁行6間の細長い建物が建つことになる。而してその桁行方向はE-24°-Nを測る。

S B 004 挖立建物跡

Ⅲb面より20cm程下から検出された建物跡で、第1次調査の時にその南端の柱が発見されていたが、今回新たにこれと対をなすと思われる掘方が発見されたものである。

既に発見されている柱を、便宜上E B 225と呼ぶことにする。

S B 004は、南からE B 225・217・218の3本の柱からなる。

E B 218は、北西隅が欠け、三角形を呈しているが、この付近は湧水が夥しく、そのため造構面がヌカルミになり、はっきりしたプランを確認するには至らなかった。

とまれ、この3本の柱をみると、方向はおよそN-4°-W、柱間は450 cm (15尺) を測る。

東城が未調査なので、建物跡であるのか、単なる掘立柱列であるのかは不明であるが、從来の呼称に従い建物跡としておく。

E B 198 挖立柱跡

ⅣF 159、160区にある掘方で、東西125 cm、南北115 cmの不整隅九方形を呈する。深さは約20cmで、略中央部に直徑35cm程の柱痕があり、掘方確認面から柱底底部までの深さは約50cmである。

これと対をなす柱痕は発見されていない。

E B 200 挖立柱跡

104 cm×96cmの堀方で、長辺が略西北方向を向く。堀方の深さは約15cm。

中央部に直徑約40cmの柱痕が観察され、深さは約4 cmを測る。

これもE B 198と同じく、対になるものは発見されていらず、遺物の出土もみられない事から、時期も性格も不明である。

S X 183 性格不明落込み

ⅣC 161区を北西隅にして、計7グリッドに亘るもので、東西300 cm余、南北380 cm余にわたって不整形の浅い落込みを形成しており、その範囲に暗茶褐色の腐蝕植物質層が厚さ1 cm程堆積している。

これらの直上には土師器、須恵器などの細片が散布している。そして、この面は略南西方に向て傾斜している。

現状では幾つかに分断されているが、本来はひとつながりのものであったと思われる。

S A 184 矢板列

Ⅲb面のすぐ下から発見されたもので、第3次調査時にもこの一部が排水溝中から発見されている。その時にはS A 002としていたが、今回新たな番号におおした。

幅約30cm、深さ約10cmの掘方にコグチの平らな杉板が並んでいる。

板の幅はS A 128と同じく10~15cmであるが、S A 128と比べてかなり疊らである。

方向はS A 128と同じE-10°-Nを測り、両者の間隔は約2880cm (約95尺) である。

両者の板材の疊密を除けば、方向と云い、様相といい、極めて類似している。或いは、この両者は対をなすものであろうか。

S D 185 溝跡

S A 184と同じく、Ⅲb面のすぐ下から発見されたもので、幅35~40cm、深さ15~20cm、方向は約E-10°-Nを測る。

溝内に多くの土器片が遺存し、数個のビットに切られている。

検出は途中まで止めてあるが、この溝が東の方でS D 004に切られていることから、これと時期を同じくするS B 003より一時期遅るものと思われる。

若干方向は異なるが、参考までにS D 186との距離を計測してみたところ、およそ2760 cm (91尺) となった。

S A 210 ピット列

直徑20~30cmのピットが、およそ150 cm (5尺) の間隔を置いて、E-8°-Nの方向に並んでいる。このうち數個のピットの中には、幅15~20cm、厚さ2~3cmの杉の板がコバを南北方向に向けて立っている。板材は当時の地表上に出ていたと思われるが、その機能は全く不明である。

ピット列は、現状ではⅣN 167区で終っている様にみられる。

S B 211 挖立建物跡

今次調査区の西南隅に位置する遺構で、E B 194・102・103の3本からなる。

E B 102・103の柱根は杉の丸太である。

E B 194は、排水構と現行暗渠とにはさまれており、夥しい湧水のため埋積土が泥状になり、明確なプランを検出することは出来なかった。掘方の中に、土器と共に板材が遺存し、その板材の状況から考えて、掘方はもう少し大きくなるものと思われる。

S B 211は、方向E-1.5°-Nを測り、柱間は約450 cm (15尺) である。

E B 101 挖立柱跡

東西145 cm、南北150 cmの不整角丸方形の掘方をもつ。掘方の南辺に近く直径約55cmの柱根があり、材質は杉である。

E B 102・103 のほぼ中間に位置し、最初この三者が対になるかと思われたが、後に異なるものと判定された。現在これと対をなすものは発見されていない。

S B 003 建物跡

第3次調査で、S B 001 の下の築地業を S B 003 が相似形に開統していることから、両者は同一の施設と解釈したが、付言すれば、S B 001 は建物下の地業を指し、S B 003 は建物自体を指す。

今回、S B 003 の南辺及び東辺南部を検出し、建物の四周が略明らかになった。これによると東西辺は約45尺、南北辺は約43尺となる。

各辺の両端の柱間は、他とくらべるとやや広く、約7尺を測る。各辺からこの7尺(計14尺)をひくと、各々31尺、29尺となり、中央におよそ30尺四方の塔の様な建物が想定できそうである。そして、現在検出されているものは、比較的軽い、東(つか)のようなものの基礎と考えられていることから、これを縦束とすれば、外側に幅7尺余の濡れ縁がまるる様にも考え得る。

S P 226 ピット群

S B 003 の東側に多数のピットが散在し、そのうち幾つかは列をなす様であるが、はっきりせず、お互いの関連は不明である。また、S B 003 との関連も不明である。

IV まとめ

今まで、調査の結果を略述して來たが、これら遺構群には、S B 220 や S D 007、S D 212 などの非常に深い溝を除くと、S B 002、S B 003、S D 004 などのグループと、S B 003 に切られている S D 185 など、つまりⅢb面の下から検出される遺構と、大別して2時期の遺構を考えられる。そしてこれらの方向を測ってみると、前者は真北に対して7度内外、後者は同じく真北に対して10度内外の傾きがみられる。

試みに、E B 213 と E B 215 を対にしてみると、その方向は E-10°-N を測る。さらに S B 004 から E B 218 を除外し、残る2者の芯方向を測ってみると N-9°-W となる。とまれ、この遺跡において、偏角の差と時期の相違がどの様に関連するものか、今後の課題となろう。

図 版



1 調査区発掘前状況



2 1区発掘状況



1 SAL28 (東より望む)



2 同 近接



1 2区発掘状況



2 4区発掘状況 (右側はSB003南辺)



1 4区発掘状況 (SA184, SD185, SA210, SB211)



2 3区発掘状況 (北より望む)



1 EB215検出状況



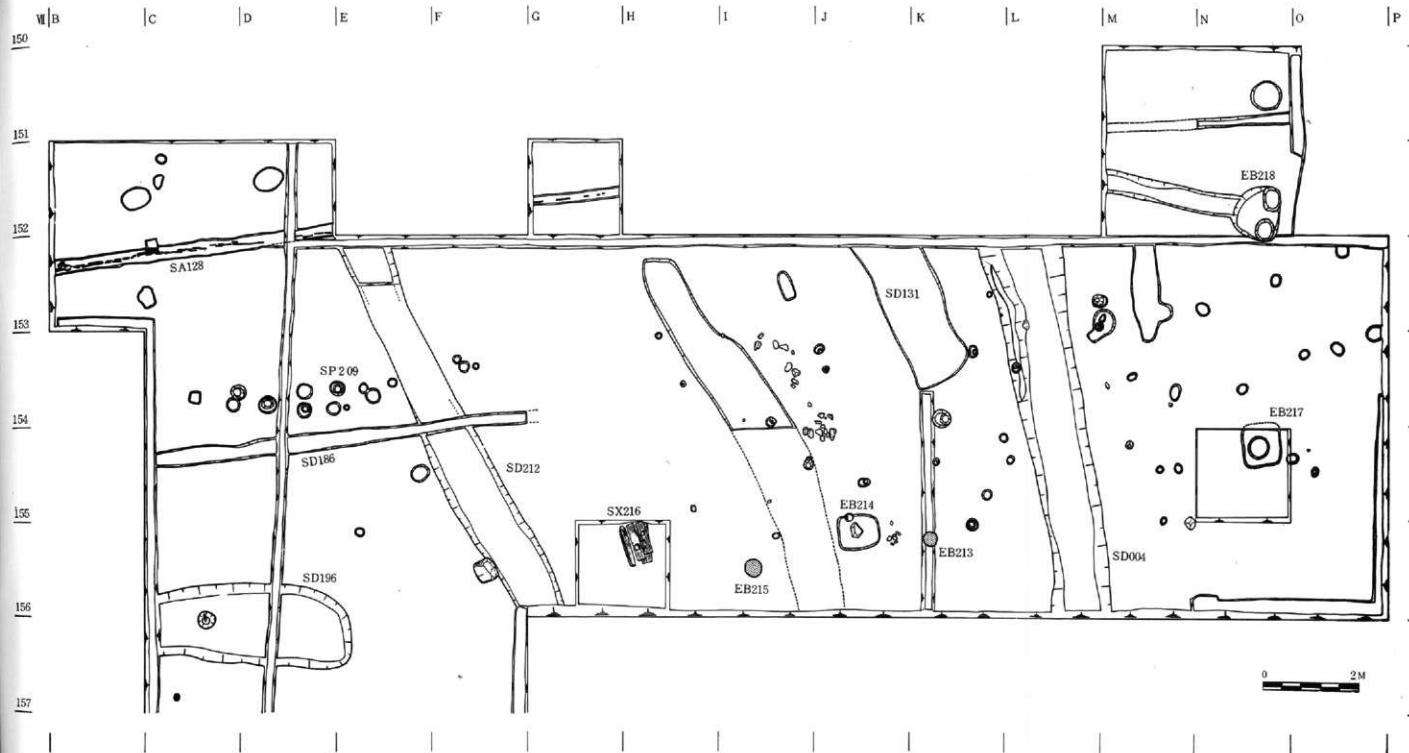
2 EB217検出状況



1 SX216検出状況



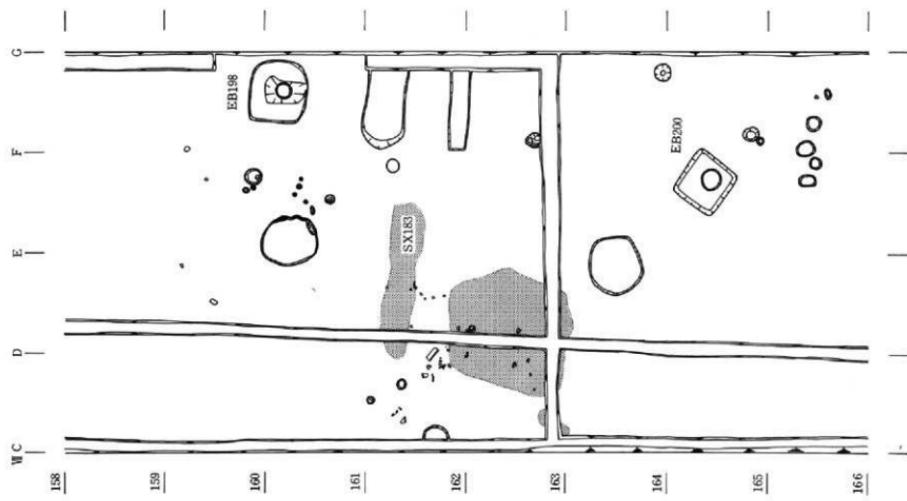
2 筏地果露呈状況（北より望む）

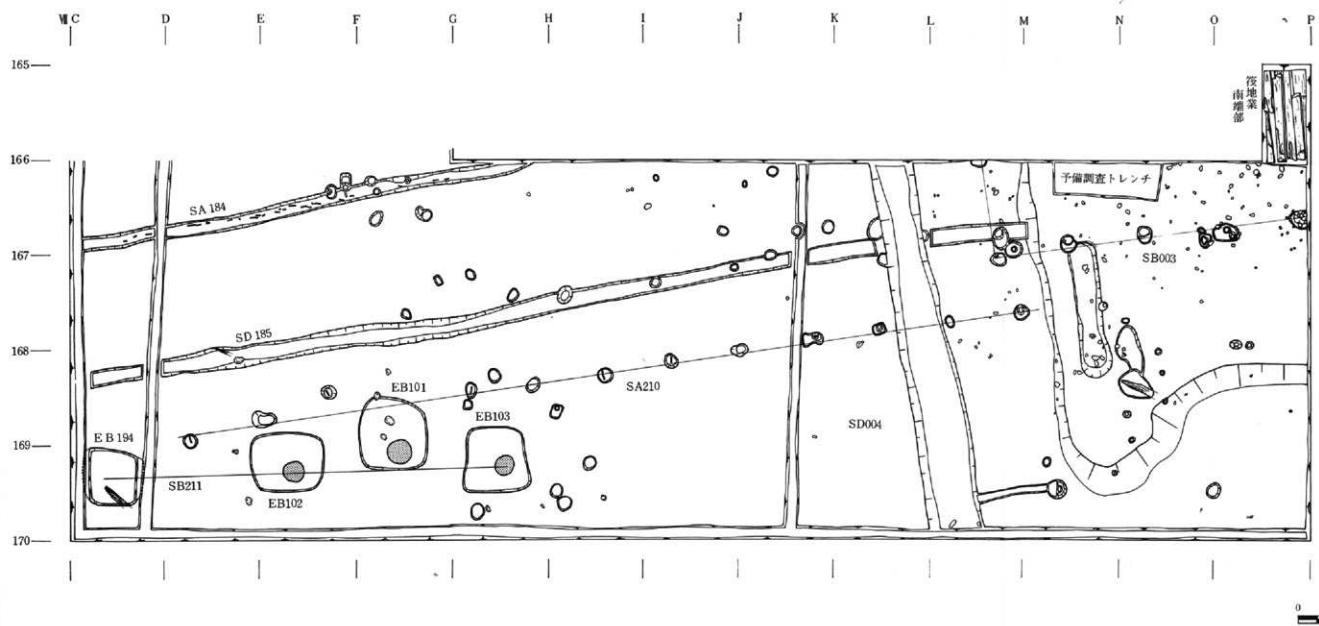


付図1 造構実測図

0 2M

付図2 遺構実測図

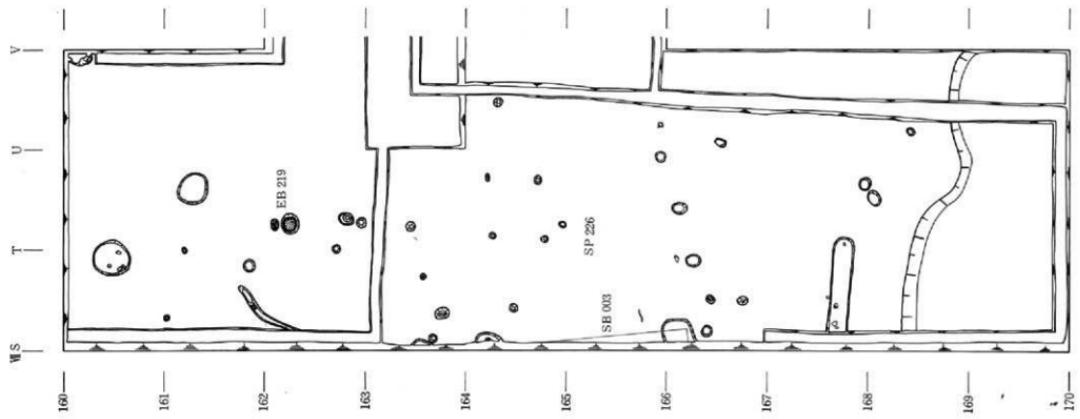




付図3 造構実測図

2m

付図4 造構造測図



山形県埋蔵文化財調査報告書第10集

堂の前遺跡

昭和51年度調査略報

昭和52年3月25日 印刷

昭和52年3月31日 発行

発行 山形県教育委員会

印刷 大風印刷